

介護保険施設利用者と留学生の会話の分析

— 山形地域語の理解を中心に —

後藤 典子・熊坂 聡・三瓶 典子
澤 恩嬉・齋藤 美穂・山上 龍子

1. はじめに

インドネシア・フィリピンとの経済連携協定（EPA）による看護師・介護士を目指す外国人の来日で、看護・介護分野と日本語教育との連携の必要性が認識され始め、介護のための日本語の教科書や補助教材が作成されてきている。本学には、日本の大学に進学するための日本語を学ぶ留学生別科と介護士を養成する人間福祉学科があり、人間福祉学科では今年度から留学生も受け入れることになった。しかし、山形で外国人介護士の教育を行う場合、上記のような教材を利用しても、特に地域語を話す介護保険施設利用者（以下利用者）との会話などは簡単ではないと予想されることから、両学科の教員が連携して、介護のための地域語教材を開発することになった。¹⁾実際には外国人介護士に対してどのような日本語が話されることになるのかを調査するために、まず利用者と留学生の実際の会話を録音し、その録音資料を基に、どのような方言が使用され、それらは外国人にどのように聞こえ、どのように理解されているかをみることにした。

2. 先行研究

使用実態を報告した先行研究にはダニエル・ロング「日本語教育における『方言教育』の問題点」(1992)がある。ロングは、日本語学習者に方言を教えるべきかどうかに関して、3つの点につき調査研究を行った。(1)「関西人は外国人に向かって方言を使うかどうか」については、1988年にロング自身が行った調査で、見知らぬ外国人(白人)に対して半数以上(51%)が関西弁を使うことが示された。(2)「標準語を学んでいさえすれば、耳にした関西弁を混乱せずに理解できるかどうか」については、関西弁の表現の意味を知らなければ、理解が難しいと指摘している。(3)「日本語学習者が関西弁の表現形式を『自然に』習得した場合の影響について」は、共通語の理解の場面において「方言干渉」によって正しく理解されない場合があることを指摘している。

山形方言については、筆者が、「外国人に対する地域語使用の実態例と外国人による地域語認識の実態—地域語を使用した外国人場面のコミュニケーション—」(1998)において山形市周辺の日本人短大生と外国人留学生の会話を分析し、山形方言が外国人(一目では外国人とわからないが、外国人であると認識したうえで会話をした)に対して使用されている実態について、どのような方言形が使用されているかその傾向を示した。

また後藤は、「山形市における地域語」(2002)において、留学生が接する頻度の高い20代~40代を中心とした山形市近辺で生活する日本人が使用している地域語についてのアンケート調査に基づき、有声化、促音化、撥音化など音韻上の特徴や、語法、表現の特徴について整理、報告を行った。この山形地域語の特徴は『山形ことばを学ぼう』(2001)の入門編という形で教材化されている。

3. 調査の目的

本調査は、利用者と留学生のコミュニケーションがどのように行われるか、その際問題となるのはどのような点かを明らかにする目的で行った。地域語は、使用する人の年齢、場面、会話の相手、また個人差などもあり、限定的に提示できるものではない。『山形こ

とばを学ぼう』を開発した際には、留学生が日常生活で触れる可能性のある地域語の抽出ということで、20代～40代の山形地域に生活する日本人を対象にアンケート調査を行ったが、介護の場面において使用される地域語はまた違った実態があると予想される。したがって本調査では、介護場面において高齢である利用者（70代～80代）が留学生に対し、どのような地域語を用いるのか、それは留学生の耳にはどのように聞こえているか、正しく伝わっているのかどうか、どのような地域語が理解されにくいのか、その特徴を明らかにしようとするものである。

4. 調査の方法

利用者の地域語使用実態を調べるにあたって、高齢の利用者に外国人介護士に対してどのようなことばを使用するかというアンケートを実施することは現実的ではないと考えた。できるだけ、実際の場面に近い形で発話資料を採集するために、日本語などを学んでいる短大の留学生に協力を得て、お話ボランティアとして利用者と会話をしてもらった。普段の介護の現場で触れる可能性の高い地域語を抽出したいと考え、「昔のあそび、昔の生活」について話してもらうことにした。その際、会話の一部始終をICレコーダーで録音した。

留学生は、日本語能力は1級程度、日本語を1年3カ月ほど学習し、日常会話ではOPIで上の中くらいのレベル、韓国からの留学生である。地域で生活してはいるが、地域語を学んだ経験はない。利用者は介護保険施設のデイサービスに週2～3回通っている70代～80代で、認知症の症状はほとんど見られない方々である。

施設の職員とも相談の上、インフォーマントとなる利用者の方が緊張しないよう、利用者全員との交流を自己紹介や短い会話などを通して行ってから、1対1で30分ほど話をしてもらった。利用者がいつも使っている部屋で、リラックスした状態で会話を録音した。

録音資料は、①留学生が文字起こしを行い、それに「よく聞き取れなかったところ」「意味を理解できなかったところ」に下線を引き示してもらった。そして、②筆者（山形市出身）が別に文字起こししたものと比較し、地域語が使用されているところをマークし、その異同を検討した。その際、文字起こしの表記、会話の内容、発話の調子、会話の流れな

どから、その地域語を理解しているかどうかを判断した。そして、「理解」されたものと「不理解」のものに分類した。「理解」と「不理解」はそれぞれ、「音によるもの」「語によるもの」「表現によるもの」に分類し、その傾向、特徴を見ることにした。

5. 留学生が理解できた地域語の分析

5-1 音が共通語と異なるが理解できたもの

5-1-1 有声化のあるもの

山形地域語の特徴として、語中・語尾のカ行音、タ行音は有声化し、その使用頻度は他の地域語に比べても最も多いことが後藤（1998）で示されている。理解されたものは、以下のようなものである。表記は筆者が文字起こしをしたもので、（ ）内は、留学生が文字起こしをしたものである。

あそご（あそこ）	あだり（あたり）	いぎでる（生きてる）
いわれだ（いわれた）	いじねん（いちねん）	うち（うち）
おどうど（おとうと）	かんこぐ（韓国）	が？（か？）
がら（から）	きせづ（きせつ）	くれで（くれて）
ここ（ここ）	ごど（こと）	すぎ（すき）
せいかづ（せいかつ）	そご（そこに）	だがら（だから）
できない（できない）	でだ（でた）	とおがった（とおかった）
どが（とか）	どぎ（とき）	ながぐ（ながく）
ながぐづ（ながぐつ）	なにが（なにか）	なんかど（なんかと）
にぐ（にく）	ばぐだん（ばくたん）	はじめで（はじめて）
はだらいだ（はたらいた）	まるぐ（まるく）	まんなが（まんなか）
むがし（昔）	やづ（やつ）	ゆぎ（ゆき）
わがい（若い）		

このように、名詞、動詞、助詞、接続詞など多くのことばが有声化していたが、留学生は濁点のない形で表記しており、意味も理解していたものが多かった。ただし、濁点のある

なしは、留学生にとって、特に韓国の学生にとっては判別の難しいものなので、有声だと認識できなかった可能性もあるが、意味は理解されていた。また、活用した動詞や形容詞は助詞などつながり「表現によるもの」に分類され、まとまったものとして捉えられるものも多い。しかし、「いぎでる」「とおがった」などあまり複雑でない活用においては理解されているといえる。

5-1-2 イ段がウ段に変化しているもの

母音に変化が起こり、イ段の音がウ段になるもので、留学生が理解していたのは以下の例である。

あっつ（あっち） こっつ（こっち） あだらすい（あたらしい）

「あだらすい」については、有声化と音変化の2つが同時に起こっている語であるが、理解されていた。

5-2 語が共通語と異なるが理解できたもの

日本語の教科書などに出ている共通語と異なるが、留学生が理解できた語は以下のような例である。

あたかい（あたたかい）	あたしだ（わたしたち）	いぐ（よく）
おっきな（大きな）	おんなじぐ（おなじぐ）	げんと（けど）
げんとも（けども）	こだごど（こんなこと）	ゴム飛び（ゴム飛んでる）
ししゃね（知らねえ）	すべた（すべった）	ちえっと（ちょっと）
ちちゃこい（ちっちゃい）	はいて（はいて）	はねがだ（はねたり）する
ほれがら（それから）	ほいな（そういう）	ほして（そして）
ほりゃ（ほら）	わがらね（わからない）	わたしだ（わたしたち）
わちし（わたし）	んだがら（だから）	

「あたかい」「ちえっと」などは「あたたかい」「ちょっと」という共通語形と似ていることから、連想が容易だったと思われる。また、後藤（1998）で示されたように、「んだ」は若者にも広く使用されている。否定の「ね」も「ない・ません」の共通語形とのゆれが

見られるものの、25%ほどの頻度で使用されていることがわかっている。また、「ほいづ」など「ほ系の指示語」も使用が確認されている。したがって、短大内外での日常の会話の中で使用の認識があり、理解語となっている可能性が高い。

5-3 表現が共通語と異なるが理解できたもの

可能表現や受け身表現では、山形地域語では促音化や撥音化が起こる。表現が共通語と異なるものとしては、やはり促音化や撥音化の例が多く見られたが、以下のものは留学生が理解できたものである。

いっけんど (いるけんど)	おどさつで (おとされて)
すべっから (すべるから)	すべらんね (すべれない)
こえかげらっだ (こえかけられた)	わがっかな (わかるかな)

その他の表現で理解できたものは、それ以外の音変化や、「べ」の使用などである。

～だけの (～だっけの)	なんだべな (何だろうな)
--------------	---------------

後藤 (1998) で示したように、可能表現や受け身表現では促音化や撥音化が起こり、若い地域語話者も使用が見られた。また、「べ」に関しては山形在住が1～2年の外国人によっても高い割合で地域語として認識されていることがわかっている。これらも山形での生活の中で地域語として認識され、理解されていると考えられる。

6. 留学生が理解できなかった地域語の分析

6-1 音が共通語と異なり理解できなかったもの

母音については、エ段がイ段に変化したものが不理解だった。不理解のものには下線を施した。「:」の後に示してあるのは、共通語形である。

あや <u>み</u> :あやめ (あやみ)	とき <u>え</u> :名前 (とけい)
つ <u>え</u> :杖 (すい)	

イ段がウ段に変化したもの

<u>す</u> んだ：死んだ（すんだ）	<u>へ</u> んに：日に（？）
<u>つ</u> なんで：ちなんで（つなんで）	しゃ <u>す</u> ん：写真（ちゃすん）

子音については、き[kɪ]が、ち[tɕi]のように聞こえる音、ゆ[ju]がじゅ[dʒu]のように聞こえる音が不理解だった。

<u>き</u> ：木（ち）	<u>き</u> って：切って（こって）
<u>き</u> る：切る（しる）	<u>き</u> て：来て（して）
<u>ゆ</u> ぎ：雪（じゅうげん）	<u>ゆ</u> り：百合（ゆうじん）

また、「ず」の場合、[z]の前に[n]音があるように聞こえる音がある。

か <u>ず</u> ：数（かぐ）	か <u>ず</u> よし：名前（かんじゅよせ）
-------------------	--------------------------

このような音については、聞き取ることができず、意味も理解できていなかった。

6-2 語が共通語と異なるか、一般に使用頻度が低いと見られ理解できなかったもの

まず、生活に関する名詞としては以下のようなものが不理解だった。

あ <u>ず</u> ぎ：小豆（あずげ／あんずき）	い <u>ぢ</u> り：一里（一時）
い <u>ろ</u> り：囲炉裏（いどり）	い <u>わ</u> し：鯛（よわぎ）
う <u>ち</u> ：家（むで／ゆき）	お <u>や</u> だち：親たち（おやじ）
お <u>て</u> だま（あてだま）	か <u>ず</u> が：かじか（かんずかん）
か <u>わ</u> ら：河原（さわら）	こ <u>ど</u> ば：ことば（こども）
しゃ <u>べ</u> る：シャベル（しゃびる）	す <u>じ</u> ：筋（？）
そ <u>う</u> り：そり（ソウル）	そ <u>だ</u> ち：育ち（そだて）
と <u>の</u> ぐち：出入り口（とのがじ）	の <u>ぎ</u> ば：軒端（のびま）
ぬ <u>の</u> ：布（むの）	て <u>ん</u> まり：ボール（てんまれ）
ゆ <u>ぎ</u> そり：雪ぞり（雪場）	と <u>う</u> がかんせい：灯火管制（とかばん）
じ <u>だ</u> い：時代（でたい）	す <u>な</u> もの：品物／物（しなめど）
べ <u>ろ</u> ：舌（べろ）	あ <u>ん</u> か：行火（あんか）

動詞は、実態をつかみやすいように、辞書形でなく会話の中で使用されたそのままの形

で示している。

いぎだけ：生きた（みぎだ）

くべで：まきなどをくべる（ふびで／くびで）

ではたり：出たり（であったり）

ひっかがったり：ひっかかったり（にかかったり）

わしえだ：忘れた（わせで）

わしえで：忘れて（わしで）

つぶぐれでしまう：つぶれてしまう（つぶがるよ）

ではてきて：出てきて(?)

めねぐなる：みえなくなる（みにいぐなる）

ごっつおうなる：ごちそうになる（おとなる）

へっだり：入れたり（いつだって）

やっかいなてる：世話になっている（やべいがらって）

生きることが当たり前の現代では「～が死んだ」は使っても、「～が生きた」という表現はあまりすることがなく、また「いぎだ」と有声化しているためにわかりにくくなっている。「くべる」は囲炉裏などでまきをくべるという行為そのものが少なくなっているためにあまり使用されない語である。「ではる」は「出る」の地域語形、「ひっかかる」「わしえだ」などは、有声化や音変化があるためわかりにくくなっていると考えられる。

形容詞では、以下のような不理解が見られた。

いっぺ：たくさん（べっそん）

よげい：たくさん（よげん）

ちえっと：ちょっと（ずっと）

すぐなぐ：少し（ ? ）

まるこぐ：丸く（まるこげこ）

すかい：酸っぱい（ ? ）

おかない：怖い（おかね）

ちゃこい：小さい（ ? ）

ろぐだな：ろくな（多くんだな）

たいかぐいい：体が大きい（ ? ）

また、不理解が多かったのは指示語である。高齢の利用者は、なかなか思い出せず指示語を使用してしまうことが多いことに加え、山形の地域語の指示語は共通語とは異なるものが多い。

あいづ：あれ（ ? ）

あっつ：あっち（ ? ）

そいづ：それ（ ? ）

ほいづ：それ（ ? ）

ほいな：そういうの（ ? ）

ほご：そこ（ここ）

ほだい：そんなに（ ? ） ほっだいに：そんなに(ほべにん)
 ほだな：そんな（ ? ） ほれ：それ（おれ？ / ? ）
 ほんどぎ：その時（あの時？）

その他、不理解だったものに、ことばをつなぐための間投詞や係助詞、接続詞などが多くあった。これらはほとんど聞き取れていない。

あのほれ：あのね りゃ：ね ～なて：なんて
 ～なの：～なんか ～な：～なんか ほして：そして
 ほれ：ね して：そして ほだがら：だから

自己の呼称「おらだ：私たち」、相手を指す「おだぐ：あなた」も不理解だった。

会話の話題によって、出現する語に違いが出ると考えられるが、利用者が自由に話をするときに話題となりやすい、「昔の生活」や「昔の遊び」などを話題としているので、ここで抽出された地域語については教材化の際参考にと考えると考えられる。

6-3 表現が共通語と異なり理解できなかったもの

表現が共通語と異なり理解できなかったものは、その異なりかたが複雑なものが多い。たとえば、有声化でも複数の有声化がまとまって見られたり、有声化のみでなく地域語形も一緒に見られたりという以下のような例である。

- *どごみでも
- *にぐがなぐなちちゃってよ
- *ろぐねんせいまでだべ

6-3-1 可能表現を含むもの

可能表現は表1に示したように、その地域語形にゆれが見られるものが多く、今回の資料で見られた例も同様である。また、可能表現の否定形において、「れ」は撥音化しているものも多く、そのため「可能」の意味を理解できていない場合が多い。また「ない」も「ね」と変化しているため、一層理解が難しくなっているようである。

表 1

共通語形	地域語形 (留学生文字起こし)				
	買えない		買われない (かわいねえ)	買わんね (買わねえ)	
できない	できなぐなはずは (なつなとは)		できねな (?)	さんねぐなた (3人ぐらいやった)	さんにえ (?)
下ろせない			下ろさんね (おろさねえ)		
しゃべられない			しゃべらんね (しゃべらねい)		
捨てられない			すてらんね (すてらん)		

6-3-2 受け身表現を含むもの

受け身表現では、動詞の語幹の形や読みなどが共通語形と異なっているうえに、助詞などに接続する際、促音化しているために理解が難しかったものと見られる。

- *おどされっから：落とされるから (おとされたから／おとされたりね)
- *くられっど：来られると (くだいとよ)
- *ゆわれっど：言われると (てわりと)
- *やらせらっだ：行かせられた (やらせだった)

6-3-3 義務・当然の表現を含むもの

義務・当然の表現も可能表現同様、撥音化が見られ、同時に有声化も生じているものは教科書で学んだものとは大きく形が異なるため、理解が難しかったようである。

- *すてんなね：捨てなければならない (すてんなに)
- *あるがんね：歩かななければならない (あるばんなる)
- *おろさんねがった：おろさなければならなかった (おろさなかった)

6-3-4 促音化を含むもの

動詞の活用語尾のラ行音部分に「ど (と)」「から」「どご (ところ)」「だ (た)」「どが (とか)」「だり (たり)」「さ (に)」などが後接する場合、ラ行音は促音化する。また、有声化や地域語形などが複合的に出現するとなお一層難しくなり、ほとんど理解されていない

ない。

- *あっから：あるから（だからね）
- *えいがどがみっど：映画とか見ると（？）
- *としとってくっど：年をとってくと（どうして）
- *はいっどご：入るところ（はいっとも）
- *かぶっどが：かぶるとか（かぶったとかよ）
- *へっだり：入れたり（いつだってよ）
- *ほいっちゃ：それに（めちゃ）

6-3-5 撥音化を含むもの

動詞の活用語尾のラ行音部分に「で／でしょ」「べ」「ね」「な」「の」などが後接する場合、ラ行音は撥音化する。可能表現の否定「られ／れない」は「らんね」となり撥音化を含む形となる。このような形も留学生には聞き取りにくくほとんど理解されていない。

- *あんでしょ：あるでしょう（あるんでしょ）
- *なてんべ：なってるでしょう（なったべ）
- *ではんね：出ない（であんで）
- *なげんな：なげるの（？）
- *あがんの：あがるの（？）
- *あんの：あるの（なの）

6-3-6 比況表現を含むもの

山形地域語の比況表現の「みだいだ」「みでだ」を含む表現も不理解が多かった。

- *うちみでな：うちみたいな（うぜんねてら）
- *いいみだいなね：いいような感じだね（と言いんでるね）
- *みだいに：みだいに（めで／べに）
- *みだいにりゃ：みだいにね（のむらっての）
- *みでだ：みだいだ（めずだ）

6-3-7 地域語形を含むもの

「んね」「んだ」「だら」「なて」のような地域語形を含む形も、複合形は一層理解が難しかったようである。

- *んねげんと：ちがうんだけど（ねえんだけど）
- *んだず：そうですね（ふたつ）
- *こごらだら：ここらへんだと（ここんだら）
- *ゴム飛びなて：ゴム飛びなんて（ゴム飛んでる）

「べし」「だぜ」「あてよ」「もね」「まねえ」「がした」「ったな」などの終助詞などは聞き取りも理解もできず、反応することはとても難しかったようである。

- *ゆうべし：言うし（いうめしって）
- *だぜ：だよ（なぜ？）
- *B29あてよ：B29なんてね（で29あってよ）
- *ひまないまねえ：ひまがないものねえ（？）
- *…がした：…ですか（からした）
- *終わったったなね：終わったんだよねえ（うわたったなべ）

7. その他利用者の発話の特徴

利用者はことばを思い出せずに、相手に確認することが多いようであるが、その表現「ないった：なんてゆうんだっけ？」「ないてゆうの：なんていうの？」なども不理解だった。留学生から見たら、日本人が外国人である自分たちにことばを確認するということは予想していなかったのだと思うが、介護の現場ではそのような表現も多用される可能性が高い。

また、今回の資料から、会話の話題として「昔の生活」の他には「自分の体調に関するもの」「戦争体験」「身内の話」などが出てきており、今回の考察では触れていないが、話題として理解の難しいものも多い。時代の知識、道具の名前、経験など、学習しなければ外国人が理解することは難しいだろう。

8. 留学生の反応

特に何も指示を出さずに会話を進めてもらったわけだが、不理解の場合もあいづちを打ったり笑ったりして、会話が途切れない工夫をしていた。不理解が重なったときは、話題を変えるなどのストラテジーを使用し会話を維持しようとしていた。介護の現場では、利用者との会話では、日本人学生でも理解できない場合が多く、その時にはうまくあいづちを打ったりして会話を続けるよう指導をしているとのことだった。日本語が通じないうちは、通常の会話においても不理解場面を体験している留学生は自然に会話維持のストラテジーを使用しているようだった。

9. ま と め

利用者と留学生の会話の実態を、留学生の理解・不理解を中心に見てきた。介護の現場での利用者との会話においては複雑な音変化による不理解が多く、よく言われる地域語辞典のようなもので理解できるようなものは少ないと言わなければならない。聞き取りの難しい音や、語形変化した地域語、また複合的に表れる音変化や聞いたことのない地域語形などとの複合形などが多く見られたが、それは留学生にとって理解の難しいものだった。特に不理解の多かった複合的な表現については、まず聞き取れるか、次に部分に分割して理解することができるかを見ていく必要がある。基本的な文法や語彙の学習に加えて、実践の場での録音などで確かめながら、意味を確認していくという地道な学習が求められることになるだろう。一見順調に見えた利用者と留学生の会話は、談話データを分析してみるとたくさんの不理解があることがわかった。その特徴も見えてきたが、教材化に向けては話題によって使用される語彙・表現が異なってくることが予想されることから、利用者が話題にしやすい他のテーマについても調査を行い、使用されやすい地域語のリストも作成していく必要がある。時代背景に関する知識についても、会話を進める際に想像力を働かせるヒントとして生かせるようなものを整備する必要があるだろう。

【注】

- 1) 平成21年度－平成23年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C)
「外国人介護士のための地域共通語を使用した介護日本語教材と指導法の開発」
研究課題番号：21520559 研究代表者：後藤典子

【参考文献】

- 後藤典子 (1998) 「外国人に対する地域語使用の実態例と外国人による地域語認識の実態－地域語を使用した外国人場面のコミュニケーション－」『山形大学日本語教育論集第2号』
- 後藤典子 (2002) 「山形市における地域語」『定住外国人を対象にした“地域共通語”教材開発に関する研究』平成10年～平成12年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 研究成果報告書 研究代表者：高木裕子
- 高木裕子・渡辺文生・後藤典子・山上龍子・佐々木範子・澤恩嬉 (2001) 『山形ことばを学ぼう』山形地域語研究会
- ダニエル・ロング (1992) 「日本語教育における『方言教育』の問題点」『日本語教育79号』日本語教育学会

【付 記】

本研究は平成21－23年度科学研究費 (21520559) の助成を受けたものである。